第 50 回　川崎市幼児教育研修大会
研修大会　全体会
月　日　平成 22 年 1 月 20 日（水）
場　所　エポックなかはら
講　師　清水　国明先生
テーマ：「子どもと考える地域環境」

〇自然楽校を始めたきっかけ
・離婚して、河口湖にツリーハウスを建てた。好きなものに囲まれ、好きなことをして過ごす暮らし。さぞ幸せなことだろうと思っていたのに、何か“もの足りなさ”を感じた。
・自分のためだけに生きる（1 人で）のは、むなしい。誰かのために、喜ぶ顔をみて自分も喜ぶ。（嬉しい）
→幸せは、人とわかち合わないと実感できない。（2 人だと 2 倍、3 人だと 3 倍になる。）ということで、子どもたちにツリーハウスを開放することにした。（土地の開放）
※自然学校ではなく自然楽校としたのは、学ぶのではなく、楽しむことを目的としているから。

〇自然楽校では
・五感（暑い・寒い）を使おう！本来使うべき感覚を十分使っていないので、イライラする。自然に入ることで、潜在能力のスイッチをオンにする。スイッチが入らないままの“子ども”になっている大人が増えている。
・最近の子どもは、キレイになっていると感じる。（髪の毛サラサラ・汗の臭いがしない）暑い目、寒い目に合っていない、人間のスイッチが入っていないのでは？

〇自然を感じるとは？
・自然の音・声がかわらない子がいる。セミの声、風の音が耳に入っているのに、何の音かわからない。（雑音と捉えている）
先生の話など、自分に必要な声は届くが、自分に必要ではないと感じる音や声は、心に響いていないようだ。
・聞こえているけど聞いていない。感じとる力が足りない。
→「耳を澄ましてみよう」というと、「ヒコーキ！」「虫！」という答えがかえってくる。静かにすることで入るスイッチがある。

〇自然を体験する
・「葉っぱの上に寝っころがろう」「葉っぱの上に座ってみよう」といっても、できない子どもが増えている。
・崖を下りる遊びを提案する。最初は 1 人も行かないが、2・3 人行き始めると、皆行くようになる。
※一緒に遊んでいると、子どもたちが、シャンプーの臭いから、“子どもくささ”になる。
・崖を下りる遊びで転んでも、遊びを止める子はいない。転んだ瞬間、体にビリッと電気が走り（スイッチが入り）もっとやりたくなる。
※先生もみずからスイッチを入れよう！
・知識を高めるために自然楽校に来るわけではないので、木や虫の名前は知らなくていい。名前を覚える、絵を描く、写真を撮ることが自然体験ではない。そうすることで自然が嫌になってしまう。何をしてもよいのが自然。

〇自然楽校のルール
●『人のせいにしないで、自分の責任で、他人に迷惑をかけないこと』
・人のせいにしない・他人に迷惑をかけないということは、他人の自由に入らないということ。他人の自由に入らないということは、自分の自由も守られるということ。
・怪我をすると、すぐ「誰がやったの？」と聞く親がいるが、親が追求しすぎると、ウソつきの子どもになる可能性がある。自分の責任において怪我をするなら、聞く必要がなくなる。
※危ないことをさせない親は、子どもに自分を守る経験をさせないこと。子どもを守るとい

うことを履き違えている。

〇自然の楽しさとは

（雨）

・雨が降っているのかを止めさせることは、できないので、いかに楽しむか、不都合を面白がるプロセスが大事。

・行事やイベントを雨で中止したら、半分はダメになる。雨が降るのが当たり前と考える。“濡れても楽しい”と思える工夫。

※雨の日の葉っぱ・虫などは新しい発見がある。

（火）

・火を付けられるか付けられないかが、人間とサルの違い。マッチ３本で、たき火をつくる。火をおこす段取りで、仕事ができるかがわかる。

（刃物）

・刃物も火と同じ。使うことでサルとの差がある。触らせない、触ったことがない、危ないものと決めつける風潮。痛さの経験、怪我するチャンス、自分が痛さを感じて、人の痛さを知る。

※楽なこと・安全なことは、人として・生きものとしてどうなのか疑問に思う。

“楽することは楽しくない！”

〇子どもに生きる力を

・どうして生きる力が足りないのか。それは、先にいる大人が自然ではないから。後戻りしているから（「若い」って褒め言葉？）成長する力が止まっている。子どもは前に行きたい（成長したい）のに、詰まって前に行けないでいる。

大人はもっと成長することを楽しもう！